三歳児・四歳児の行動とことばの発達における考察

長谷部　和　子（児童英語・言葉）

はじめに

約20年前に幼児に英語を教える機会を持つこととなった。その頃はまだ幼児が英語を学ぶのは珍しく、教材もほとんどなく、全くの手探り状態からのスタートだった。最近は小学校で英語教育を教え始めていることもあって、早期英語教育にも強い関心を持つ父兄も珍しくなくなってきている。当時の興味はもっぱら幼児が英語をどうのように捕え学習していくかという点に関してだけであって、彼らの日本語については母国語としてごく普通に学習していくものと考えるだけであった。そして、久しく幼児と接触する機会を持たなかったが、最近、幼児に英語を教える機会を再び得て、彼らの英語を学ぶ態度、日常の生活やことばに引き付けられて観察していると、とても興味深い言動も多く、つい20年前と比較してしまっていた。特にここでは３歳児、４歳児を対象として観察してみた。今回は、２年間の夏休み、冬休み、春休みを除く一週間に一度持たれる４歳児対象の英会話の時間の前後に、幼児たちと接する時間を持って体験した、幼児たちの日常のことばや行動を書き留めてみた。３歳児においては給食を同じ机で取ったり、その後の遊びを見ることで、耳にした内容や行動を書き取ってみた。それだけでは充分理解できない彼らのことばの内容や、普段の行動で疑問に思ったことは、幼児の保育者である幼稚園の各担任からの聞き取りに頼った。３歳児・４歳児の日常の行動や表情が彼らのことばの発達にどのように影響を与えているかを検討する。

３歳児

例１

ある日の散歩の時間に、一クラス23名は敬老の日のためのおばあちゃんやおじいちゃんへのお手紙を持って、200メートル先のポストまで歩いて行った。一人は保育者と手をつなぎ、残りの22名はそれぞれペアになって道路の右側を手をつなぎながら、車に気をつけて歩いていった。そのうち後ろから２列目のペア（Ａ子とＢ子）が進まなくなったのである。そうこうしているうちに、ペアの一人が手をつなぐのを嫌がりはじめた。実は、この散歩の前にもＡ子とＢ子は、Ａ子の髪の毛をＢ子が結ってあげるようとして、喧嘩をしたばかりだったのだ。

二人の仲は、良いときはすこぶるよいのだが、悪くなるとひっかき合いのけんかになることもある。散歩も終わりに近付いたとき、嫌がるＡ子にあくまでも手をつなごうとするＢ子の姿があった。あれだけ嫌がっているのに、決して諦めずに何度も何度も手を差し出して、無理に手を引っ張ろうとするＢ子。これ以上放置することは危険も考えられるので、保育者が止めようとすると案の定Ａ子は泣き出してしまった。それでもまだ手をつなごうとするＢ子。自分の思いを行動に現さないではいられないＢ子は、まだ『手をつなごうよ。仲良くいっしょに行こうよ。手をつながないと危ないよ。』と、充分にことばで説明できない。Ａ子は散歩の前の記憶が思い出されたのか、それとも、手をつないで歩いて行く途中で何か気に入らないことでもあったのか、彼女も充分にことばで説明はできない。

Ａ子は「嫌だ」ということばは、口に出せ

てもなぜ嫌なのか説明はできないし自分でも嫌になった自分がまだ把握できていないかもしれない。ただ、泣くことがA子の行動を表現することばなのである。B子は自分が嫌がられているということも充分理解できず、手を無理につなごうという行動を起こすことで自分の感情を表現している。

このように子どもは嫌なことは「いや、いや」と言ったりあるいは泣くことで表現し、楽しいときは目をきらきら輝かせ、顔中笑って、飛び上がらんばかりの元気の良さで、生き生きとした表情を見せる。

「ことばの中の子どもたち」で保母として現場に長く携わってきた今井和子氏は著書の中で次のように述べている。[i]「幼い子どものことばは、行動や感情、それに表情などに押し出されて発せられるように思います。ですから、ことばは、行動や身体の一部であると私は考えています。――中略――つまり、幼い子どもの行動や表情と一緒に、ことばをとらえる必要性と、子どもの行動や感情の表現などもあわせて、子どもの身体のすべてが言葉でもあるととらえることが、非常に大事であるわけです。」

例２

C子とD子は双子の姉妹である。４月の入園当時、二人は保育者と全くことばを交わそうとしなかった。この二人には日本語のことばがまだ存在しないのではないかと思われる程であった。そして、この子らの養育者も「この子達は話せません。」と説明していた。しかし、二人の間には理解できることばが存在するようでお互いに理解し合っている様子が伺える。ただ、幼稚園の保育者は誰も、二人が声を出してことばを交わしているのを聞いたことはなかった。そのため、二人が理解するための手段として使っているのが、ことばなのか、それともことばがなくても、二人は理解することができる手段を持っている状態にあるのかは誰にも分からなかった。保育者の問いかけに対して一切、無表情で聞いているだけであった。

まず、入園当初、他の園児と一緒に教室に入ることができず、１週間程経って教室に入れるようになってからも、椅子に座ることはできなかった。そして、椅子に座れるようになってからも、給食には一切、手を出そうとしなかった。給食の時間には他の園児が一生懸命に食べている間、机の上の食事を目の前にして、椅子に座ってじっと見ているだけである。お腹が空けば自分で食べ物に対して興味を示すだろうということで他の園児とは、離れた場所で、給食と一緒に二人だけを残して置いたが１時間経っても、２時間経っても食べようとはしなかった。最終的には、保育者が食べさせる結果となってしまっていた。二人の発育状態は良く、他の園児と比べてみても大きい方である。普段二人はお手伝いさんに食べさせてもらって、食べなければ無理にでも口に運んで食べているらしい。６月になって、保育者が、何とか手にフォークやスプーンを持たせて手を添えて食べ物を口に持っていく動作を毎日続けてみた。そのうち、双子の姉であるC子は、他の園児が半分ほど食べ終えた頃になって、自分の好きな食べ物を手で直接取って食べたりフォークで刺したりして、少しずつではあるが自分で食べるようになってきた。

けれども、妹のD子は相変わらず食べないままであった。ほとんど同じ頃、姉のC子は保育者の問いかけに対して返事だけはするようになってきていた。妹のD子が自分で食べ物を口にしようという姿勢を見せたのは、夏の暑い時期に幼稚園で出された冷たい「すいか」であった。全園児が一緒になって行動する、祭り的な行事の時に出された「すいか」に群がる他の園児を、いつものように、ただ呆然と眺めるだけのD子であった。ついに見かねて「すいか、おいしいよ。みんな食べているから食べようね。」と言って保育者が冷たい「すいか」の小片をD子の唇に付けてやると、その小片の汁を吸ってみて、おいしかったのか急に興味を示し、自分で別の「すい

か」を手に取り食べ出したのである。その後、僅かの量であるが、幼稚園の中で自分の力で食事を取るようになってきている。

しかし、相変わらず、以前と同じように二人は一緒に昼食を取っていても、しばらくは、ただ他の園児を見て黙って座っているだけで、特に、食事に興味を示す表情は見られない。保育者は自分で食べ物を口にしてさもおいしい食べ物を食べているのだという表情をして「おいしいよ。食べようね。」と何度も促すと彼女たちはようやく少しずつ食べ始める程度である。妹のD子は姉が食べ始めても静かに座っているだけである。ほとんど他の園児が食べ終わろうとする頃に、ほんの少し手で食べ始めるか、あるいはちょっと食べ物をフォークやスプーンで取って食べ始める。あまり時間がかかってもと、保育者がロールパンなどを口に持っていくと、食べ始めるが、自分の手に持たせようとすると食べるのを止めてしまう。そして、そのロールパンを保育者に差し出して、食べさせて欲しいしぐさを見せるのである。

6月初旬になっても相変わらず、この頃の二人にことばの変化は見られず、姉のC子が返事ができるくらいで、D子はこちらの言っていることが理解できているのか理解できていないのか分からない状態であった。けれども、二人が幼稚園内でかなり積極的に行動する部分も、頻繁に見られるようなってきた。職員の集まる事務所に二人で入っていって、それぞれの机にセットになっている椅子を、二人で力を合わせてバラバラに組み入れてしまうのである。特に妹のD子は面白いらしく「キャツ、キャツ」言いながら走り回り、保育者が注意してもなかなか止めようとしなかった。夏休みに入る前の7月中旬には同じクラスの中で友達ができ始めていた。常に二人でしか行動しなかったのがバラバラになり、それぞれに友達が付いてわずかの時間ではあるが、遊びの仲間に何とか入れるようになってきた。3歳児とはいえ女の子の中にはとてもしっかりした世話好きな子がいて行動の遅い子などを見ると、服を着るのを手伝ったり、カバンの中に物を入れるのを手伝ったりと、まるでおかあさんのように他の園児の面倒を見ることがあって思わず笑ってしまう。この二人にも世話好きな、いろいろなことを手伝ってくれる友達ができて、遊びの輪の中に誘い入れてくれるようになってきていた。

この二人が、比較的しっかりと自分のことばで話し、保育者の問いかけに対して答えてくるようになったのは、夏休み後半の夏期保育の頃であった。夏の水遊びに、3歳児全員が園児服をパンツに履き替えて、靴下は上履きの中にしまって、椅子の下において庭のプールに出かける。30分も遊んで教室に入り、もとの園児服に着替えるのだが、妹のD子の靴下が見つからない。どうせ尋ねても答えないだろうと1週間に1度しか顔を出さない観察者は、黙って靴下を探したが見つからない。そのため、探しながら「靴下、どこいったんだろうね。」と何度も口で言いながら探していると、D子は「靴下、ない」と言うではないか。驚いたが、驚いた表情は見せないで、

観察者：「どうしてないの？」
D　子：「干してある。」
観察者：「干してある？」
D　子：「おしっこで濡れちゃった。干してある。」
観察者：「あら、そう。洗って、干してあるの？」
D　子：「うん。干してある。ない。」

観察者は、今まで、幾度となくD子に話し掛けたが、いつも返事は返ってこなかった。担任ではないし頻繁に顔を合わせているわけではない観察者だから、無理もないことと思っていたが、初めての話がかなりの会話になっていることは驚きであった。家政婦さんの「この子達は、話せません。」という説明で彼女たちにはことばが無いと片付けられていたが、果たしてどの程度のことばをもっているのか、皆目検討がつかなかった。けれども彼女たちの頭の中では、確実にことばは蓄積され、発達していたのである。観察者と話してくれた

この時期に、いろいろな話が徐々にできるようになってきていた。友達との会話、バスの中でのいろいろな保育者との挨拶など。一度会話ができるようになると、まさしく一度に吹き出す噴水のようなもので、あれよあれよという間にとても多くのことばが頭の中に入り、口から発せられていく。

二人には、走って遊ぶなどという行動も全く見られなかったが、全園児で取り組む『運動会』などという行事では、走らなければならない。総て経験の無いことには最初は抵抗を見せる二人であるが、友達に手を引っ張ってもらって何とか走って、10月の運動会に参加した。

環境に慣れてきた、自分で行動を起こす意欲が出てきた、あるいは自分を表に出すことに抵抗が無くなってきたためとか、いろいろ原因は考えられるだろうが、これだというものを結論付けるのは難しいのではないか。ただ、この子達は入園まで、かなり普通の園児とは違った生活を強いられてきたのは事実で、現在は普通の生活をしながら、少々の後れは見られるもののごく自然な発達に少しずつではあるが、軌道修正されてきているといえるのではないか。

[ii]「子どもがことばを獲得していくプロセス、それは、自我の発達そのものではないかと思います。自分を表すことばを模索しながら、自分を表し他人を感じながら、また自分のことも分かっていくのだと思います。ことばは、その時々の子どもたちの心を表し、育ちをつげるたしかな灯かりです。」と前述の今井和子氏は著書の中で述べている。この双子の姉妹はある意味で自我の発達を押さえられてきた部分があるのではないか。例えば、今井氏は[iii]「食事は求めずとも与えられ、物は豊富に与えられます。子どもが、食事を口にするたびに‘えらい、えらい’とほめられる。ある時は、‘これだけでもたべてね’と懇願されます。自分のために物を食べる。こんなあたりまえのことをほめられたりおだてられたりする子供たち。正常な光景とは言いがたいでしょう」とも述べている。

さらに幼児が言葉や生活習慣を獲得していく上で忘れてならないのが幼児に対する愛情と信頼である。高杉自子氏らは新保育内容『言語』の中で次のように述べている。[iv]「幼児が言語を学習していくために必要な条件は、心のかよう人間関係である。この人なら自分を受け入れてくれそうだとわかると、幼児はその人の言葉のひびきを好ましいものとして聞く。そして強い関心を持ち、ことばを理解しようとし、またそのサインをモデルとして学んでいく。もし幼児の養育者が義務的に幼児に接するようなことがあれば、ことばの発達が必ず遅れるともいわれている。」

4歳児

例1

自我の発達を押さえるようなことがあれば、ことばの発達は遅れることが考えられるが、4歳児になると著しく自己主張が強くなる。4月の4歳児のクラスは3歳児から入園生活を送り、かなり幼稚園に慣れてきている園児と新しく2年保育で入園してきたばかりの園児とが混在している。最初は、まだ幼い3歳児と同じように、比較的おとなしく保育者のことばに耳を傾ける。そして徐々に個性を発揮してくる。夏休みを過ぎたころになると、夏休みの開放的な気分と自分のやりたいことが、比較的はっきりと認識されてきて、しかもことばの語彙が著しく増えて滑らかに話せるようになり、それぞれの園児がこれから自分のやりたいことや、夏休みにやってきたこととを、次から次へと保育者に向かって話そうとする姿勢を見せるようになる。登園してきたばかりの保育者と園児が一対一でいる場合はまだ良いのだが、クラスの中で全員に話しかけている時の園児の語りかけは、保育者にとってはまるでことばの機関銃を受けているようなもので、誰が何を話そうとしているのか把握して、しかも園児に満足感を持たせることは、とうていかなわず、とても苦労する。

次に挙げるのは夏休み開けの英会話の時間

の前に保育者に浴びせられたことばのいくつかである。

「飛行機に乗っておじいちゃんのところに行ってきた。」

「私も、おばあちゃんのところに電車で行ってきたの」

「くり、拾った。見て？」

「みっちゃんね、ここ、切ったの。」

「夜、スーパー行ってアイスクリーム食べた。」

というように全く友達の話は聞こうとしないで自分勝手にどんどん話し出す。その時の園児は自分の話だけは保育者に聞いてもらいたいと願っている。保育者は、全員の中の一人だけを相手に話を聞くわけにはいかないので、「ちょっと待ってね。順番に聞くからね。」と他の園児に納得させて順番に全員の話を聞かなければならない。これにも限界があり、待っている間に自分が話すのだという意欲を失ってしまったり、他のことに気を取られたりと、話す機会を無くしてしまう園児も数多いのである。そこでどうしても家庭での養育者の役割が大きくなってくる。

「幼稚園教育要領」の中の「言葉」の内容欄に

1．先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり話したりする。
2．したこと、見たこと、聞いたこと、感じたことなどを自分なりに言葉で表現する。
3．したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
4．人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
5．生活の中で必要な言葉が分かり使う。
6．親しみを持って日常のあいさつをする。
7．生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
8．いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
9．絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き想像する楽しさを味わう。
10．日常生活に必要な標識や文字などに関心を持つ。

と解説されているようにこの時期において幼児の話を充分に聞いてやることは非常に大切である。角尾和子氏は『言語』の中で[v]「幼児期において大切なことは、一対一で話ができるということである。この一対一で話ができるということは、相手の言うことをよく受けとめて聞くことができるということであり、また自分の言おうとすることを、相手によくわかるようにしっかりと話すことができるということなのである。この能力は、よく考えながら聞くことができるという能力であり、よく考えながら話すことができるという能力なのである」と述べている。この時期での養育者や周囲の関わりを持つ大人との一対一の充分な会話が、後の情操教育に大きく影響を与えていくのではないか。じっくりと話を聞いてやり、その話に対して質問をされることは、幼児にとってその時間は自分で相手を独占していることであり、自分に注意を向けられていることを充分に実感できる時間でもある。2歳のころは「これ・なに」形式の質問が、幼児から大量に発せられる時期であるが、幼児は返事の内容はともかく自分で覚えたことばに、相手が答えてくれることによって、会話をしている・触れあっている喜びを感じている瞬間なのである。これと比較すると4歳児は内容が理解出来たうえで発せられる質問である。また、こちらが幼児に質問すれば自分に与えられている質問の内容に答えようと一生懸命になり、きちんと答えられれば満足感を味わう。質問に答えようと頭の中でことばを考えている様子は、実に真剣な表情である。

例2

一般的に、自我意識が現れるのは3歳児頃で、会話的行動が著しく進展する4歳児は、ことばを使っての自我の発達が強く現れてくる。わがまま的要素の強い3歳児の自我意識に対して、ある程度の社会性が身に付きはじめるのが4歳児である。また、自分のことば

の発声に伴う自分の行動が出来るようになってくる４歳児ではあるが、まだ自分の行動のコントロールが不十分で自分を主張することだけしかできない傾向も見られる。

10月のある日、４歳児の英語の時間中での出来事である。「グー、チョキ、パー」の英語版を利用して幼児達は‘You must go (back to your seat)! I must go (back to my seat)!’を学んでいる。

最初に日本語の「グー、チョキ、パー」にあたる英語の‘Paper, Scissors, Stone’を手の動作と共に何度も実行させ、覚えさせる。そして、園児二人で‘Paper, Scissors, Stone’を口ずさみながら、じゃんけんさせる。そのうち、‘Paper, Scissors, Stone’を園児達が口にすることに、抵抗が無くなってきたら、じゃんけんで勝った園児は‘You must go!’と負けた園児に対して言い、負けた園児は、そのすぐ後で‘I must go!’と言って自分の席にもどる。勝った園児は、もう一度じゃんけんをする権利を獲得する。限られた時間内で、全園児にじゃんけんの機会を与えるために、自分の順番がくるまでは、列を作って待っている。負けたら自分の席に戻るというルールは、担任の保育者によって教えられている。ほとんどの園児は納得ができないまでも、約束だからと戻るのが一般的である。その日、Ｆ男はじゃんけんがおもしろくてたまらないのか、自分が負けてもそのまま続けてじゃんけんをすると言い張って、保育者の言うことを聞こうとしなかった。いくら言い聞かせても、その場を動こうとしないで泣き出してしまった。普段でも、この頃のＦ男は自分の話を保育中の保育者に話して、聞いてもらおうとする姿勢が見られていた。

自我の抑制という面で考えると、この時期の幼児への指導は非常に重要であると言わざるをえない。４歳児では、自分と他者との関わりが、そろそろ理解出来る年頃である。この時点での第３者（保育者・養育者）の介入は必要である。良く説明し、考えさせることで、その後の友達関係が違ってくる。[vi]「同輩とよい仲間関係をつくることは、自律性を養うという目標の観点から大切である。ピアジェ理論の自律は個人主義を最大限に生かして、しかも自分がしてもらいたいように他人にもするということにある。社会的に自律するには、いろんな仲間とのやりとりを通じて自分の欲求をコントロールすることの経験をかさねなくてはならない。」と無藤隆氏らは述べている。

例３

４歳児には、５月の連休以降に、初めて英語を教えはじめるのだが、最近の国際化で英語が何であるのかを、園児に説明する必要は全くない。今から20年前なら、同じ４歳児でも英語が何であるかを知っていた園児は、１クラスの中でせいぜい２～３名であった。尋ねれば、自慢そうに‘dog’あるいは‘cat’等と大声で叫んだものである。今は「英語、習ってる。」という返事が、かなり多く返ってきたり、英語しか話せない園児がクラスに見られたりする。ごく稀に、５歳児で、英検４級合格などという園児も実在している。半数が英語が何であるかを知っていれば、知らない園児はクラスの中で黙って座っているだけだろうから、他の園児の話から、英語が何であるのかを知るのである。1990年代に入ってからの英語ブームは、園児にも大きな影響を与えていて、巷の語学学校で、週１度英語を習いに行く園児はかなりの数に達していた。しかし、この１～２年は少し下火になってきているような感じを受ける。

1997年度に初めて経験した園児であるが、英語の教授者として、教室へ入っていくと、クラスの全園児が、英語の授業を受けようと机に着いている。その中の一人、Ｅ子が私の顔を見るやいなや、めそめそ泣き出し始めた。最初からこの事態が起きうることを予想していた様子の担任は、Ｅ子のそばに立っていた。そして泣き出すＥ子を膝に乗せて、他の園児と同じように椅子に座ったが、あまりにも「いや、いや」と泣きじゃくるために、教室の一

番後ろに椅子を持っていって、座ることにした。その間も常に「大丈夫だよ、怖くないよ。後ろで見てるだけだからね。」と言い続けていた。教える私としても最初は事態があまり良く飲み込めず、「こんなに嫌われるなんて、どうなっているのだろう。」としばらく考えさせられてしまう結果となった。

後で担任に尋ねてみると、E子は「英語」ということばを耳にするだけで、極端に恐怖感を顔に出すという。その後、3回の授業は、1回目と同じように教室の後ろで、担任の膝の上に乗って受けていた。そして他の園児と同じように机に一人で座れるようになっていった。あまり近づかないように、しかも不自然にならないように、他の園児と同じように英語をグループで練習させるなど、一人で机に座れるようになってからも教授者としては、毎回かなりの神経を使うこととなった。徐々に慣れてくると、とても活発に発言しようという姿勢を示し、挙手等も元気良く行っていた。教授者にもなついて、自分から話しかけてくれるようになってきた。英語の知識も他の園児と比較すると、かなり進んでいて、今までに英語を学んだ経験があるということを示していた。

E子は、もの心ついた時から、お稽古ごとの一環として、英語を習わされてきた。そして、きちんと勉強しなければ叱られるという経験を、過去に持っていた。E子は外国語を学ぶという観点からすれば、一番避けなければならない状況に置かれたということである。恐怖感を持たせるような習い事なら、何も習わない方が良い。特にこの時期は口を使って言葉を話すことで、自分の経験を言葉と結びつけ確認し、心をも形成していくとても大切な時である。後に義務教育の中で学び始めたとき、拒否することも考えられる。また、英語は日本語と同じように、ことばなのである。まず、母国語を確立することが第一であり、最悪のケースとしてE子に考えられるのは、心理不安から日本語を話すことも拒絶しかねないということである。

但し、筆者は、早期語学教育に反対するのではなく、おおいに奨励し、賛成なのであって、楽しんで語学を学ぶというのであれば、早ければ早い方が良いというのが持論である。学ぶという過程で、厳しさは必要であろうが恐怖感は行き過ぎである。自分の言葉を覚えていく過程で、恐怖感を持って覚えるという幼児達がいったい何人いるのだろうか。幼児達にとって、ことばを話すというのは楽しくて、楽しくて仕方のない行為であって、大人の真似をすることで、ことばを覚え、大人になった気分になったり、大人を笑わせたりすることで喜びを分かち合う。ことばは自分の身近な人々との心をつなぐ重要な鎖である。

例4

言語環境として家庭環境や社会環境が大きな役割を担っていることは、今までに述べてきた例からも明白である。特に家庭環境で幼児に大きな影響を与える代表的なものは養育者である。生まれて間もないころは、それが母親であり、そして、父親・祖父母であったりする。その後、生活をともにする兄弟・姉妹・友達と環境によって違いはあろうが、毎日の生活で数多く接触する大人達である。そして、社会環境として幼児の生活に非常に大きな影響を与えているものにテレビが挙げられる。

最近は養育者があまりにも時間に追われた生活を送っているために、テレビに用心のお守りをさせている家庭も多く見られる。また、ビデオの普及で、幼児が喜ばないような番組が多い場合は、レンタルビデオに頼ったり、録画ビデオに頼ったりと、かなり養育者との直接的な会話を持つ機会は減ってきている。園児のことばを聞いていると、明らかに親の受け売りと思われることばを、多々耳にすることがある。

保育者：「強い風が吹いて、フェンスが倒れちゃったね。」

G　太：「今度は台風10号が日本を襲うんだよ。」

４歳児としてのことばとして受け止めると、理解して話しているのかいささか疑問であるが、テレビかあるいは両親が心配そうに話しているのを、幼児なりに台風は大変なこととして記憶したのだろう。

若い独身の保育者に対して

Ｈ　雄：「先生はラブラブおるんか？」

保育者：「ラブラブって何？」

Ｈ　雄：「愛し合う人や。」

テレビドラマの影響かあるいは、日常生活の中のどこかで耳にしたことばを、かなり理解したうえで使用している。

お昼の給食時間の後で、片づけを終えた園児が、友達と重い食器を２階から１階に運ぶ途中で

「あー、重い。もう私、限界だわ。」

このことばも、大人が重いものを持ったときに発したことばを、耳にして頭の中に残っていたために自然に口から出たのだろう。

つい最近の講演の中の幼児の『ごっこ』遊びの話の中に『離婚ごっこ』があるというのを聞いたが、案外内容は「家は私のものよ。車はあなたが持っていってもいいわ。」などという台詞を言い合っているのかもしれない。『離婚ごっこ』があるのであれば『再婚ごっこ』という遊びがあっても、不思議はないなどという意見まで飛び出して非常に驚かされた。これも実際に両親が離婚した経験を持つのか、あるいは周囲の人達が誰かの離婚話を話しているのを聞いていたのだろう。

周りの大人のことばは、幼児にとっては良きも悪しきも、全部がモデルとして学習されている。両親の体格や口腔内の構造は遺伝するので、声と発声法はよく似てきて当然であるが、言葉の選び方と内容には、充分注意したいものである。

言語発達において、とても興味深い研究がある。[vii]「ミルナー(E.Milner)は、小学１年生について、言語発達指数の高い子と低い子について、家庭における親子の相互作用の分析を行い、次のような事実を明らかにしている。すなわち、言語発達指数の高い子どもの親子の相互作用としては、一般に朝食、登校前、夕食で親子間の話し合いがよく行われており、子どももその会話に積極的に参加している。これに対して、言語発達の低い子どもの家庭は、朝食や夕食時に子どもと話し合う子とが少なく、話すとしても親からの一方的な形のものが多かった。」

この中で重要なのは、会話があるということだけではなく、大人が子どもの会話にどのように反応しているかである。大人の問いかけに対して子ども本人が充分満足して、話ができているか、あるいは、充分コミュニケーションができるような関係が出来ているかである。欧米の中流家庭では、子どもがある程度の話が出来るようになれば（５～６歳児）大人の会話の中に入れて、子どもは子どもの意見として、大人が耳を傾ける。その場で不適切な言葉の使い方は注意され、考え方において受け入れられない場合はその理由をきちんと説明される。ハイ・スクールや大学においても、必ずスピーチ・デイベイト関係の科目が用意され、きちんと話が出来ることは、その人のステイタスを表すことでもあるので、幼児期から注意深く教え込まれる。言語発達と社会階層は正比例するとも言われていて、偏差値だけが高くてもコミュニケーション能力が劣っていたり、人前でスピーチがきちんと出来なければ一人前とは言われない。

む す び

今の３歳児・４歳児を20年前のそれと比較して見ると明らかに語彙数は多くなっているし、文章もやや長い文を使っているように感じられる。彼らの行動を見ているとことばの面でも動きの面でも、３歳児は、20年前の３歳児半、４歳児は、４歳児半ぐらいづつ早く生長しているかのような印象を受けた。また、彼らを取り巻く社会環境も、大きく違ってきている。その社会環境が幼児の語彙数を増やし、過去ではまず幼児からは聞かれなかった語彙を使用している場面に遭遇する。逆に死

語になっていることばもあると考えられる。

幼稚園勤務の栄養士さんによれば、3歳児は入園当初、非常に食事の量が少ない。その後段々と量が増え、6月、7月の蒸し暑い季節にまた少し減り、10月の運動会終了後から4月の入園当初の2倍ほど食べるようになる。4歳児も年間の動きは、3歳児とほとんど同じということである。そのため少しでも無駄にならないように、食品材料の量を考えて注文しなければならない。これはこの3・4年特に顕著に現れている。今から7・8年前は食品材料の量は年間、ほぼ同じで全園児が非常に良く食べたということである。

現代の若者は友達と遊んでいても、ファミコンに向かい会話が聞かれないという話を良く耳にする。大学生の話を聞いていても、使われている言葉や文章は非常に限られている。与えられた文章を復唱することで、質問に答えることはとても得意である。また、文章を書いても稚拙な文が並んでいることが多い。まず、きちんとした文章が話せなければきちんとした文章は書けない。これらの原因は案外、幼児期のコミュニケーション訓練が充分されないまま大きくなってしまい、受験戦争の中で頑張っていかなければならない状況に置かれているからではないか。今後とも幼児期のことばを聞き取り、そこから浮かび上がってくる問題点なども提起できれば幸いと考える。聞き取り調査にあたっては、東海第一幼稚園と第二幼稚園の先生方と園児達に深く感謝したい。

（注）

i　今井和子　1987　言葉の中の子どもたち　童心社　幼児のことばの世界を探る　p.55.

ii　Ibid., p.108

iii　Ibid., p.204

iv　高杉自子・平井信義・森上史郎（編）　1980　新保育内容講座4　言語　光生館　p.107

v　角尾和子（編著）　1978言語川島書店　p.11

vi　無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ（編著）　1986　子ども時代を豊かに　学文社　新しい保育心理学　p.173

vii　高杉自子・平井信義・森上史郎（編）　1980　新保育内容講座4　言語　光生館　p.160

—児童教育学科　幼児教育—